

(国語科)

書く楽しさを味わい、自分の言葉でいきいきと表現できる子どもを育てる

— 作文教育を通して —

大阪市立長吉出戸小学校 藤原 愛子

1. はじめに

本校では、24年度より「なにわ作文の会」から講師を招き、作文教育の研修を行ってきた。また、25年度から27年度の3年間にわたって「大阪作文教育研究大会」の会場校となり作文教育についても学んできた。その研修の中で「今の子どもたちは情報化社会の中で、刺激的で退廃的な文化の中で生きている。その社会の中では、ときに表現力や想像力のないことばが飛び交い、子どもたちの豊かな感性や文化が育ちにくい環境にある。」ということであらためて学んだ。本校の子どもたちも、携帯電話でのメールやLINEのトラブルが年々増えてきている。また、人を傷つける言葉を日常会話の中で簡単に使う子どもが増えてきている現状も見受けられる。

こういった子どもたちの実態をふまえて、表現の向上に取り組む時だと感じ、考えや思いを書き表すことの楽しさを味わわせ、自分のことばで伝えることができる力をつけていきたいと考えた。そこで、書くことによって自分の思いを表現し、その喜びを感じることができる国語科・作文教育の研究に取り組むことにした。「書く楽しさを味わい、自分の言葉でいきいきと表現できる子どもを育てる」をテーマに各学年で授業実践をとおして研究を進めてきた。

2. 研究のねらい

子ども一人一人の思いや考えを大切にしながら、興味・関心・意欲を引き出し、互いに認め合い励まし合って学習に取り組む過程を通して、自ら学ぶ力といきいきと表現する力を育てたいと考えた。

- (1) 発想を広げ、表現の喜びを味わわせる題材の見つけ方を工夫する。

「おもしろそうだなあ。」「書いてみたいなあ。」と、子どもの意欲をかりたてたり、子どもの発達段階や実態に応じた題材の見つけ方を工夫する。

- (2) 意欲を高め、思いが表現できるような支援・援助のあり方を探る。

子どもの発想を大切にし、一人一人のよさを引き出したり生かしたりする支援の工夫をする。さらに、互いの表現のよさを認め合い、自分の思いを表現することへの意欲を膨らませ、書く力をつけることができる支援・援助のあり方を探る。

3. 取り組み

書く時の指導としては、以下のことを基本とし取り組んだ。

「書きたいことを書く」「書きたいように書く」「書きたいだけ書く」

以上のことを基本としたのは、作文を書く意欲を高め思いが表現できるようにするためである。本校で作文に対するアンケートをとった結果、作文嫌いの子どもたちの理由として「どのように書けばいいかわからない」「句読点の付け方がわからない」「書いているうちにぐちゃぐちゃになる」「めんどくさい」など、思いを表現する前に書き方やルールにとらわれていることが多くあった。そこで、作文を書く時には以上の基本を提示し、「自由に書いていい」という安心感から思いのままに書くことを楽しみ、自由な

表現が生まれるよう取り組んだ。

いきいきとした表現を生み出すために、起承転結の構成や、文法表現の指導に焦点を当てるのではなく、子どもたちの書いた作文は何を表現しようとしているのかを読み合い、話し合い、共感し合うことを大切にしたい。起承転結の構成や、文法表現の指導については、国語科の物語文や説明文などの単元を通して指導していくこととした。

その他、「作文」や「詩」「絵本」の読み聞かせの活動も各学級で行った。たくさんの表現に触れさせることで、どのように書いていいかわからない子どもたちにも「自由に書いていいんだ」という意欲を持たせるようにした。

また、学年を超えて作文を読み合えるように、作文を廊下に掲示するようにした。

4. 研究のまとめ

(1) 研究の成果

○「表現力が育つ」

作文の「題見つけ」を生活の中に位置づけることで、書きたいことをいつでも発見できるようにした。その中で子どもの書く意欲が高まり、自己表現したい欲求がついてきた。そして、「書きたいことを書きたいように書きたいだけ書く」という活動を通して、書くことに対して抵抗感が無くなり、作文に対して意欲を持って取り組む子どもが増えていった。このように作文に対する意欲が育つことにより、一人一人に個性のあるいきいきとした豊かな表現の力がついていった。

○「集団が育つ」

作文を読み合うことによって、子どもたちが互いの思いや生活を知り、学級の中に励ましあったり共感しあったりする環境が育ってきた。そうすると学級は、自由に自分を語ることで安心した雰囲気になり、自分のことばで自分の思いや生活を綴りたいいきいきとした表現が生まれるようになった。

○「子ども発見ができる」

同じ作文でも、指導者の読み方によっていろいろなとらえ方ができることがわかった。また、作文から子どもの思いや生活を知ることができ、色々な角度から子どもを見つめられるようになった。作文での子ども発見・子ども理解を、学級づくりに生かすことができた。

(2) 今後の課題

○「言語力の育成」

「書く力」は豊かになったが、「話す力」は十分とはいえない。今後はこの作文教育を通して、今求められている「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」の言語力を付けていくためには、どのような取り組みが必要なのかを深めていくことが大切である。

○「文法力の育成」

起承転結の構成や、文法表現についても意識して書く力をつけていくことが必要である。学力テストの結果、本校の子どもは「要点をまとめて書く力」が低く、文法表現の知識理解も弱いことがわかった。書くことに抵抗が無くなり表現する力はつきつつあるのだが、「要点をまとめて書く力」や文法表現について、国語科の物語文や説明文・資料をまとめ、発表する単元の学習を通してさらに書く力を付けていく必要がある。